

ニュースアップ

東京社会部(前神戸支局) 五十嵐朋子

神戸「レクイエムプロジェクト」来年10年

思いを一つにしないでいい。それが、忘れられない人に寄せる思いを重ねよう。阪神大震災(1995年)の被災者による合唱コンサート「レクイエム・プロジェクト」が来年、活動開始から10年を迎える。被災経験語り合う人たちが集って数々の組曲を生み出し、全国の被災地へと活動を広げてきた。その足跡をたどりたい。

被災者で合唱団

苦しみ歌に託して

涙の意味を忘れない、あの日の悲しみを忘れない、聖なるかな、聖なるかな、永遠の光で、彼らを照らしてください(組曲「レクイエム」より「あの日を悲しみを忘れない」)。歌詞はラテン語。

「被災した人が、悲しみや苦しみを歌に託せる場を作りた」。思いが具体化したのは2008年だった。新聞広告で合唱団員を募ると、約60人が集まった。当初は震災15年の10年にコンサートを開くことが目標だった。

体験語ることから

「被災した人が、悲しみや苦しみを歌に託せる場を作りた」。思いが具体化したのは2008年だった。新聞広告で合唱団員を募ると、約60人が集まった。当初は震災15年の10年にコンサートを開くことが目標だった。

阪神大震災からの2年となった今年1月、神戸市中央区の神戸文化ホールに、追悼の黒い服をまとった「神戸いのりのとき合唱団」の団員ら約100人の歌声が響いた。指揮したのは、合唱団代表でもあり、歌う全ての曲を手掛けた作曲家の上田益さん(61)だ。上田さんは大阪出身。阪神大震災の起きた1月17日、東京の自宅でぼんやりとテレビを眺めていた。1週間前に仕事で訪れていた街が炎と煙に包まれていた。「自分ひとりだけ難を逃れたような後ろめたさ」を感じた。

「音楽家としてできることはないのか」と考え始めた。99年からは犠牲者を追悼する光の祭典「神戸ルミナリエ」で流れる音楽の作曲を担当した。

思い重ね 夢と希望全国に

お母さんと呼ぶ声がだんだん小さくなって……。最期を知る人に聞いた。母親の気持ちを思うと涙が出た。

毎年1月になると、うつむきながら取材に応じる母親の姿がテレビに映った。「どんどん自分の中に閉じこもっていきよに見えた。でも会いに行けなかった」

神戸市長田区で被災した青山真理子さん(59)は、近所の崩れた文化住宅を鮮明に覚えている。小学2年生だった長男の同級生一家が住んでいた。避難してのかなか、姿が見えず、外に出た近所の人たちと話したが、実際は、がれきの下にいた。同区を襲った火災にのみ込まれてしまった。

助けてあげられなかった。「しゃあないやん」。夫の佳弘さん(58)は力づけようとしてくれたが、忘れることができない。生活再建に奔走するうちに10年がたった。青山さんはある時気づき、いたたまれなくなった。「あの人たちのために泣けなかった」

上田さんは団員の話の聞き続けた。「もっと大変な人がいるから、つらいと言えなかつた」。封じていた思いを「初めて外に出せた」という団員がいた。その話をもとに、組曲「レクイエム」(10曲)を作詞作曲した。

歌詞はキリスト教のミサ曲に使われる典礼文を含め全てラテン語にした。「日本語で



コンサートを歌う団員ら(神戸市中央区の神戸文化ホールで、1月、五十嵐撮影)

はつらい記憶が呼び起こされすぎる」と考えたからだ。神聖な祈りの言葉の中に、被災者の気持ちを織り込んだ。

「元氣ですか、寒くないですか、私が見えますか、私はいつも、あなたを思い出す大切にしています(組曲「レクイエム」より「出会いと別れ」)

「コンサートでレクイエムを歌う団員の表情は、真っすぐだ。悲壮感も笑顔もない。「歌詞の意味は考えない。考える」と泣いてしまうから」と団員たち。音程を保ち、強弱をつける。歌に込めた思いを伝えるための決まり事の二つを、丁寧に守りながら歌う。

10組曲、計61曲誕生

多くの人の願いに反し、災害は起き続けている。「歌を続けるなら、同じように心の痛みを抱える人たちがつながる」。団員らの希望もあり、10年のコンサート後も活動は続いた。09年に20人の死者・行方不明者が出た兵庫県佐用町の水害や、11年の東日本大震災など、阪神大震災以外にもテーマを拡大した。それぞれの土地を思う合唱曲も生まれた。福島県の詩人

和合亮さんの詩による東北のための組曲「黙礼」、岩手県の詩人、宇部京子さんの詩による「三陸鉄道が行く」。現地の人々が詩をつけ、上田さんが作曲するスタイルが定着した。これまでに10組曲、計61曲が誕生し、今も新曲作りに取り組む。

佐用町、岩手県北部、仙台市。神戸の団員が各地のコンサートに出向き、現地の人たちが一緒に歌う。逆もある。震災にも目を向け、広島や長崎、東京にも活動の輪は広がっている。舞台をともに踏み、つながりが生まれた。

津波に流された街の光景は、かつての神戸のものとは違うが「同じ歌を歌っているから、気持ちがわかるよね」と交わし合う笑顔がある。思い浮かべる風景は違っていても「思いを重ねよう」。歌い続けることで、忘れずにいられる」と神戸の団員の林田裕子さん(56)は確信している。

聖なるかな未来、聖なるかな夢、希望を捨てないでほしい、夢をあきらめないでほしい(組曲「レクイエム」より「未来に向かって」)

組曲「レクイエム」は終盤、力強い明るい和音とともに、こう締めくくられる。それは上田さんの願いであり、歌い手が自分自身と同じ被災者に伝えたい願いでもある。

団員を募集
レクイエム・プロジェクトは来年1月に予定する10周年記念コンサートに向け神戸の団員を募集中。直近では7月16日午後1時半から仙台市の日立システムズホール仙台で公演がある。問い合わせは上田さん(080・5181・6692)。



上田益さん(中央右)の指揮で練習する、神戸いのりのとき合唱団の団員ら(神戸市灘区で、1月、五十嵐撮影)